

山田 IS 相談会

2022年7月13日（水）13時～15時

オンライン

山田肖子（名古屋大学国際協力研究科教授）

山崎（名古屋大学研究員）

コメンテーター

春日直樹（一橋大学名誉教授）

出口（京都大学文学研究科教授）

松田素二（地球研）

プロジェクト代表の山田さんから資料に基づいて30分、研究の概要についてプレゼンテーションがあり、その後、コメンテーターから質問とコメントがなされた。

山田さんからは、この研究は「sustainability」を取り上げて検討するが、それはたんなる言葉の概念整理ではなく、言説を研究することが社会の基底に埋め込まれた価値観にアプローチする深さと広がりをもったものであることが強調された。

春日さんからは、この研究が何をターゲットにして、何と何を対照して繋ごうとしているのかについて確認があった。科学的言説としての sustainability とローカルな生活に埋め込まれた知識としての sustainability との乖離を明らかにして後者に依拠した捉えなおしをすることは評価しながらも、科学的言説として取り出す方法や分析作業をどうすることが妥当かについて問題点が指摘された。また要素に分解して全体を構成する認識論のもつバイアス（近代知的な）については、その限界を理解しながら、その認識論を活用していくなかで次の可能性を探るという手順の説明があった。

出口さんからは、そもそも言説とは何かということ、また言説分析を通して何をうみだそうとしているのかという問いがなされた。言説という思考をするさい、対象の真偽性は問われず、相互の競合を通して支配的な言説（勝ち組）と抑圧される言説（負け組）に区分され、勝ち組の言説を操り独占する一部の言説エリートが出現することになる。言説ゲームにおいては、誰のため、誰に対して、誰を否定するために、ということが常に問われなければならない。こうした権力作用としての語用という観点ではない、言説に対する対応は、もう一つの言説ゲームを構想するか、ゲームから降りるかしかない。山田研究は、もう一つの言説ゲーム志向であることを明確にすべきではという助言があった。

これに対して山田さんからは、これまでのアクター・主体の属性と密接に結びついた言説像ではなく、それから切り離された言説、論理そのものが、人々にどのように使われ新たな意味を作り出し新たな状況を構築しているのかという視点が、もう一つの言説ゲーム観であるとの説明があった。

今後については、以上のような斬新で野心的な研究の枠組を踏まえて、より具体的な調査方法、データ収集方法を明らかにすることで、本研究の魅力と説得力が増大することが確認された。